

襟を割って荒く手を差し込むと……豊艶の蕩けるような手触り。泡の如き柔さ、ぬくさ。今、手を差し込むまでは気付かなかった。新たに気付いた。はっ、と驚くほどの肉量。掌に目一杯。握りきれないほど。

掌から溢れるほど。握って初めて気付いた。

顔を埋めたい……と男が思わずにはいられないその魅惑の物体がそこに隠されていた。

羞じらいを浮かべつつも、お富はその手の暴虐をおっとりとして許している。ちょっと胸を反らして、御自由にお愉しみ下さいまし……と捧げてくる。

許されている。許されている。それが嬉しい。嬉しくって……手が止まらなくなる。

襟をずばりと開く。剥いて、剥いて……両の乳房を引き出し、はだけさせると……絶景が広がった。

こんな……でかかったっけ？

視界に溢れそうなほど……魅惑の丸い物体が、おんな肉の豊かな実りが二つ並んだ。

先ほど湯殿で俺の身体を洗いながら、羞じらいも忘れ、振り回していた乳房から一回り大きく見える。その分、目の悦が大きい。

割った襟に絞り出されているせいもあるのか。

「ああ……左十様のお手の物にしていただけ……うれしゅうございます……存分にお遊び下さいませ……これはもう……左十様の御手のためのもの、お口のためのもの、お顔を埋め……ふふっ……いろいろお使いいただけます……」その潜めた笑みにおんなの艶気がぶ厚い。

そのふつくらとした笑みの底に、重々往々の狎れがたゆたう。

縁切り寺で縁を切った、としか聞いてはいないが。成る程。どれだけ床技を仕込まれたのやら。

それで手放せなくなっただが故の。と言う顛末か？

が、目の悦が唆す。そのふわりとした塊の魅力を。柔肉の充悦を。さらに貪れ、と。

逆らうこと能わず。不可避。

ゆっくりと頭を倒していく。背を丸めていく。それをしつとりと微笑みながらお富が見詰めている。

ついにその柔肉の頂点に……口が届いた。

あ……と、お富の軽く空いた口から溢れた悦声は、喜色に満ちていた。

一度唇で触れたら……頭の中が柔色に染まった。淡い肉色に溢れた。圧倒的に。これ以外のことは意識からすっかり消え失せた。記憶まで飛びそうだ。

乳。乳房。おんなの。旨肉。甘肉。どこまでもつるり、とした唇の滑り。はむはむと唇だけでも啜えられるほどの柔円。吸えば口の中でもこりと盛り上がり、ぱつと離せば……うす紅の痕が残る。一つ付ければ、あつちにもこつちにも付けたくなる。

「ああつ……左十様つ……左十様つ……谷間は……谷間はお許し下さいまし……着物で隠しきれませんからあ……表を歩けなくなってしまいます……からあ……あああ……」

甘く蕩ける声が耳に吹き込まれる。耳奥をを擦る。脳を撫でられているかのような声だ。

肌臭、乳臭……そんなのと合い塗れながら聞かされると、気が霞むかのような心地。桃源の気とは斯くもあろうか。

勿論言うことなんて聞けるわけがない。ぐい、とその堅帯に回した腕で強引に持ち上げ、あぐら座の腿に座らせ、頭の高さにまで差し上げた。かぶり、と唇でそつと噛み付いた。

見える総てがお富の乳になった。その柔らかな曲線。その高々とした丸い盛り上がり。どこも蕩けるほど唇に柔らかい。止まらない。頭の中がそれだけに染まった。

あつちに吸い付き、ここに吸い付き……鼻で持ち上げて下までも。

ふうふう小さく息が乱れるほど熱中してしまった。

「あう……もうすっかり……右のお乳も左のお乳も……左十様のお印だらけ……

わたくしのお乳はこれですっかり……左十様のものと刻印されてしまいましたわ……うれしゅうございます……」

「乳首だけ……どうしても付かないのが残念だ……も、ちっと吸ってやる……」さらに両腕でがぶりとやわやわの尻を持ち上げ……お富の両手がしどけなく肩に掛かり……目の高さの上まで差し上げると……ふわりと盛り上がるその先端に吸い付いた。ちゅうちゅうと吸いたくった。

「ああっ！だめえ……そこは……そこわあ……別でございますからあ……別でございますからあ……あああ……」

お富が身体を振ると、その大きな肉量がぶるぶると震える。それがまた唇の中の乳首をこねこねしている。口から逃がしたくなく、思わず少し噛むと……

あああ！と弾けるような哀鳴がお富の口から迸った。

その背がびくんと跳ね、両手一杯の中の柔尻がもぞもぞと動いた。

腹の底がぞくり、と震動した。おんなを責める愉悦だと気付いた。

こんな……いじめたくなるおんながいるだろうか。

甘々といじめ尽くしてやりたくなるおんなが。

噛み噛みと小さく乳首を噛み付けると、その都度、ああっ！だめっ！いやあ！と激しく反応する。その肌がじわりと熱くなる。

いじめた分、やわやわと。舌全部を使って舐め転がす。

「ああ……優しいのもだめえ……お乳が……お乳が溶けてしまいます……からっ……ああっ！……心が蕩けてしまいますからあ……ああ・あ・あ……」

くたりと俺の頭に擦りつけるように倒しかけたお富の首も熱い。

囁くような艶声も耳に奥深く……甘く心を乱していき……もう一心に犬のように舐め尽くしていた。

半立ちの一物を握りしめていたお富の手がいきなりざわめいた。

ふと気付くと袴は脱がされかけていた。下帯は緩みきっていた。

いつの間に？ そんな感触は少しも無かったぞ……？ 乳房をいじめられながら

……？？？

女性にょしよの指の早業よ……

戸惑っていると、お富の指が俺の下帯をすりと引き抜き、摘まみ上げた。

あれ？もう解けてる？

袴こそまだ脚に残っていたが、あとはいつの間にか剥き出し。

「……もう……もう、この……おっぱいはもう左十様のもの……いつでも手慰みにして下さいまし……でも……わたくしのこのお口も……捧げさせていたただきたく存じます……左十様……わたくしのからだのあらゆる所……貴方様の御為おんために……お楽しみのために、ございますこと……お知りおきいただきたく……ふふっ……しかと、お確かめ下さいませ……」

すると蛇が這うように……俺の身体に丸い丸い乳肉総て擦りつけるように……緩めた腕の中でお富が下がっていく。いつの間にか大きく開いていた俺の脚の狭間に。

え。

口って。

そこまで仕込まれているのか？ この淑やかな婦人が？

今まで抱いていた印象と差がありすぎる……？

えっ、えっ、と心が動揺しているその僅かな隙間。

すると下りていったお富の小さな頭が、股間に到達し……あぐら座の腿にその両手を置いて、ああん、と空いた小さな口が……まだ半立ちのままの俺のものをするりと納めていった。

んうううっつっ！！！

熱い。沼だ。じゆるじゆるに汗気が、唾が溢れている。その中をぬたぬたと蛇がくねる。お富の長舌だ。

纏わり付く。ぬらりと茎を舐め上げ、ぬらぬらと解け、また別の所に絡まりつき、引き解くように擦られていく。ううう。

血が集まる。その分頭の血が抜けていくようだ。貧血のような霞み。眩み。

その分、一物はきりきりと突き立っていく。

そのお富の小顔に深々と。

舐め舐めと蛇のようにその舌がずり上がってくる。纏わり付き、解けながら、先端に近づいてくる。

口の中でどう動かしているのか、何故それが出来るのか。

不思議に思っていると、ついに先端に届いた。一番敏感なあのかぶれに。

雁の周りを取り巻き、ぬらっと動かされた！

あうううっつ！ 脳裏にぱちぱちと火花が散った！

反り返りの敏感なところを一撃され、腰が撥ねた。お富の顔を押ししてしまった。俺のものがさらに深々とお富の口に潜り込んでしまう。

痛いか苦しいか、と一瞬焦ったが！

お富とみれば余裕綽々。喉奥に迎え、少し、こねこねと首を振って喉奥で撫で回すと……ぬらりと首を引き、また雁首廻りに長舌を回してくる。

ううう。あう。

その回り込んだ舌が……すりっ、すりっ、と、巻き込んだまま！雁のあちこちを逆撫でてくる！

っくうっ！ くあっつ！

おかしいっ！ 人の舌はそんな動きが出来るのか?!?!

どう考えても……できない……はずっ……出来るはずが……んあああ！

この小顔の中で。艶麗な顔の中で！ 膈長けた美貌を艶やかに朱に染めて！

この小さな口の中で。一体何が起きているのか!!!

絶品と言うにも絶品過ぎる。おかしいってえ……あああああ。

あの小さく長い舌が、どう動いているのか。

何もかも判らなかつたが、ただ、うっ、あっ、と小さく喘ぎを溢しながら、思わず後ろ畳に手を付いて、あぐらの上半身を左右にくねらせていた。

「うっ。あひっ。んほっ。くはあ！」

その変な声の連打に、ついにお富がうふっ、くすくすと笑い出した。

そのお富の小さな頭が上がってくる。ぬらぬらと一物が長々と唾に塗れて、かっちかちに屹立した姿を現してくる。

この小さな頭のどこまで入っていたんだ？と、それは目の驚きだった。

ぬらりと総て吐き出し、その先端に一つちゅ、と吸い付いた。

お富の愛惜が深く感じられて、嬉しくなる。

が。

その不可解で絶品の舌の妙技から一度離れられたことに安堵したのも大きかった。

「……どうということだ……？ 何をどうやってる？」

少し息が乱れながらそう問いかけた。

お富はくすくすと笑うばかりだ。

「余りおかしな声を出されますと……うふふふ……集中できませんっ……んふふふ……」

「これ以上集中されてたまるか。なんだこれは……?」

「ふふっ。真面目ではないのです……」

「真面目ではないおんなでしたので……しろ、と命じられれば半刻でも……それ以上でも……」

「前の前の前の旦那様は……これを大層好みでいらっしやいましたので……気が付けば、夜が白むまで……」

真面目でないって、そういう方面……? えっ……?

「これだけで果てて……終わりそうだが……」

お富が目の前のかんかんにいきり立つものに両手を添え、愛おしげに撫で擦り、軽く扱き上げながら、そのあちこちにちゅ、ちゅ、と吸い付きながら、ふわりとした笑みを浮かべた。

「ご安心下さいまし……左十様……ここで達するところまでいかぬよう……強く戒められて覚えたものでございます……ただ……生殺し……とか言う非道いお言葉もいただきましたが……」

やめろ。その通りだ。死ぬから。

生殺されてしまうからっ!